

“未到の切り口、追究

世界の目意識し創作

木に和紙、竹、繭玉そ
してガラス。日本的と
もいえる素材で、現代ア
ートの世界に新しい地平
を切り開く造形作家の角
永と和夫さん。

**米拠点に
造形作家
角永 和夫さん**



① 作品制作にあたり溶解の作業をする角永さん ② 溶けたガラスのひもを垂れさせて制作した角永さんの作品。いずれも石川県鶴来町八幡町のアトリエで



木に和紙、竹、繭玉そ
してガラス。日本的と
もいえる素材で、現代ア
ートの世界に新しい地平
を切り開く造形作家の角
永と和夫さん。

国内外での拠点は、米国
・ロサンゼルス。ここに
収蔵庫を置いて、主に米
国内で発表活動を展開し
ている。純粋にアートを
追究する角永さんの性格
からして、どこの大学を
出たとか、どんな組織に
所属しているかが問題に
なる国内では、とても発
表する気がおきないだろ
う。そんな気詰まりな所
より、当然ながら作品そ
のものが対象となる欧米
を選んだということだ。

創作に全力を注げる方向
に走ったわけだ。それに
「個展の会期が一月か
ら三月月と、日本よりか
なり長い方がいい」。

角永さんが使ってきた
素材は、生かし方によっ
て工芸っぽく、あるいは
彫刻っぽくなる。が、そ
ういう点に陥らず、あく
まで現代アートを目標
とす。「誰もやっていな
ことをやりたい。切り口
にオリジナリティーがな
いと、どうも…」と話
す。例えばガラス制作。
最初の発想は「大きなガ
ラス作品が作りたい」と
いうことだった。ではど
うしたら、大作を手かけ
ることができるか。そこ



〈6〉

から方法論に発展する。
試行錯誤の結果、一四五
〇度で溶かしたガラスを
一点めがけ垂らすことに
した。

感じさせず、照明の柔ら
かさもあって作品に自然
さが漂うところに、こ
のガラス作品の味があ
る。

ただし、それでも問題
は残った。巻き取ったガ
ラスを、職人さんに垂ら
させてみた。手作業なの
で手がぶれる。すると垂
れる先がずれてしまっ
ぶれると、職人さんが元
へ戻そうとする。そした
ら意識が加わって、狙っ
た作品とはならない。
「作為に近い意識といっ
たものまでそぎ落とすと
いうこと」と説明する。
そこで考案したのが、人
手を使わないで一点に垂
らす手法だった。

今年初めに、米国・シ
アトルでの会場でも、木
や竹の作品とともにガラ
ス作品も展示した。編
状に垂れた痕跡が残った
作品、フォルムが玉型で
なく、終盤に盛り上がった
作品。意識や作為を
今では陶の方にも視線が
めぐっている。焼き物は
すでにやり尽くされた
分野に見えるのだが、角
永さんは「針を刺すよう
なコンセプトと誰もして
いない切り口に出合った
時に、やればと思っ
と語る。その晩には、も
う一步前進した造形の
世界が見えてくるはず
だ。

北陸の
文化